平成２８年１２月１９日（月）

老球の細道２９１号

高校新人地区大会雑感
（ああ！スペーシング）

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

「ヤマアラシのジレンマ」という考えがある。ドイツの哲学者ショーペンハウエルの寓話から生まれた。その寓話は、寒い夜に、2 匹のヤマアラシが体をぴったりとくっつけて温まろうとしたところ、お互いに自分のトゲが相手を傷つけてしまったため、相手を傷つけない、ちょうど良い距離感を保つために、くっついたり離れたりして、ちょうど良い距離感を探ったという話である。

この寓話はバスケットボールのオフェンスにも通じる。くっつきすぎるとお互いにじゃまし合うようになり、離れすぎるとパスが届かなくなったりする。ちょうど良い距離感がチームオフェンスを機能させる。この距離感を「スペーシング」と言う。「チームオフェンスはスペーシングなり」と多くのコーチに言わしめる所以である。

今大会もアップセットを期待したが、今回も若松商業の男女ともダントツ勝ちという結果に終わった。新人メンバーに変わっても勝ち続ける若松商業はすごかった。他のチームはアメリカ大統領選挙のようにはいかなかったようである。

オフェンスにおいては１：１の勝負が基本であるが、１：１をスムーズに行うために他の４人がじゃましないことが大切である。大会を顧みると、ほとんどのチームがボールに集まり、ボールマンの１：１をじゃましている。そのために、１：１をしかけるボールマンは自分のデイフェンスに抑えられるのではなく、ヘルプデイフェンスに抑えられてタフシュート（無理なシュート）を落とす、ターンオーバーをする。それを繰り返して徐々にチームオフェンスは崩れ、ゲームが終わったら大差で負けていたという状況だった。

松江高専の森山恭行コーチの論文『バスケットボールのオフェンスにおけるファンダメンタルスキルとして捉えた人とボールの移動について』で下記のことが記されている。

【１：１のオフェンス能力に優れたものを持ちながら５人の一員として十分機能しない選手がいる。アシストしてもらうことが苦手で、自分でボールを持たないと何もしない選手がいる。このような選手は、自チームがオフェンスで自分がボールを保持していないときに、コートの「どこに」「いつ」動けば良いのかをコート上で判断する能力に欠けている。

模倣による高い技術の習得が期待できるのは、ボールを伴った動作、あるいはボールの周辺の動作だけである。だから、多くの選手は適切な指導なしには、オフボールのときに「どこに」「いつ」を理解して動けない。指導者もボールを持っている選手のプレイに多くの関心を持ち指導助言するが、指導者として最も力量を問われるのは、選手が興味を持ちにくい、あるいは指導なしには理解しにくいボールを持たない時の動きを、どれだけ教えられるかである】

オフボールマンの動きは「スペーシング」のルールを指導することである程度解決する。バスケットボールＩＱはスペーシングの動きで判断される。スペーシングはミニから身につけなければならないファンダメンタルでもある。多くのコーチはこの事実に早く気がついて選手に適切な指導をしてもらいたい。そうしなければバスケットボールのチームプレイの素晴らしさを永遠に理解できないで終わってしまうだろう。